様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 28 日現在

機関番号:24201
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520619
研究課題名（和文）
辛亥革命以後における旗人社会の民族的帰属意識の変遷に関する研究
研究課題名（英文）
A Study on the Changes of Ethnic Identification in the Bannerman Society after the Xinhai Revolution
研究代表者
ボルジギン･ブレンサイン（Burensain Borjigin）
滋賀県立大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：00433235

研究成果の概要（和文）：本研究は、清朝という一つの帝国の崩壊から中華人民共和国というもう一つの多民族国家の枠組みが形成されるまでの間に、それまで満族の形成に加わったと思われていた旗人集団（満洲旗人、蒙古旗人、漢軍旗人）が、モンゴル族や漢族、ダウール族など多くの民族の形成に分散していったということを明確にした。

研究成果の概要（英文）：
This research aims to study the ethnic identification of the Bannerman groups (Manchu, Mongol, and Han) between the collapse of the Qing empire and the establishment of a multinational People's Republic of China. These groups are usually thought to have contributed to the formation of the Manchu nationality, but this study has clarified that they have in fact been dispersed and merged into various nationalities such as the Mongols, Han Chinese, and Daur.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 20 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 21 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成 22 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：辛亥革命、旗人、民族意識、モンゴル、満洲

１．研究開始当初の背景

(1)清朝の崩壊から 1950 年代の現代中国の民族識別に至るまでの半世紀において、満洲旗人、蒙古旗人や漢軍旗人によって形成されていた旗人集団は一体どの民族の形成に加わったのか。長い間この問題は明確な答えがないまま、一部の漢軍旗人が漢民族に加わったのを除けば、満洲と蒙古旗人は皆現在でいう満族の形成に加わったと考えられてきた。

(2）一方、中国において 1950 年代に作られた民族の枠組みは今やもう国家の基本的な政治の枠組みとして定着し、識別当時の作業、特に旗人の民族的帰属性に関する詳細な認定作業がいかに行われたのか明確な整理がなされないまま今日に至っている。

２．研究の目的

本研究は、清朝という一つの帝国の枠組

みの崩壊から中華人民共和国というもう一つの多民族国家の枠組みが出来上がるまでの間に、民族集団が如何に融合集散を繰り返したかを辛亥革命以後の蒙古旗人や八旗集団に組み込まれたその他のモンゴル系民族の足跡を追うことによって明確にしようとするものである。またこの作業を通して、民族とは如何につくられていくのか、国家によって人工的につくられた枠組みの中に生きる人々の所属意識とアイデンティティは如何なる状態にあるのかを明確にしていきたい。

３．研究の方法

(1)本研究は、清朝時代に書かれた漢語、モンゴル語、満洲語の文書史料や1950年代の中国における民族調査資料を収集分析したうえで、中国国内の複数の地域及び台湾、モンゴル国などでフィールドワークを行い、文献史料の分析とフィールドワークの結果を綿密に結合させながら進めたい。

(2)本研究は、基本的に歴史学の枠組みの中で展開するものであるが、台湾やモンゴル国も含むかつての清朝の支配範囲内における複数の国家と地域にまたがっており、中国や台湾・モンゴルなど数か国の研究者と協力して研究を遂行するという国際的なネットワークの構築によって実現する。

４．研究成果

(1) 初年度にあたる20年度はまず国内で資料調査を行った。その後6月にはモンゴル国で国際学会参加（学会発表した）兼資料調査を行った。7月には、内モンゴル中部のチャハル地域、河北省北部地域でフィールドワークを実施し、また9月には再度モンゴル国でフィールドワークを行い、国立アルヒブで資料調査を行った。そして9月下旬には中国の内モンゴル自治区の区都フフホトや遼寧省などの地域で八旗子孫に関する実態調査を行った。

こうした国内資料調査や一連の現地調査の結果、清朝の崩壊後多くの旗人が漢族にまぎれ込んでいたが、内モンゴル地域を中心とする蒙古八旗の子孫はいち早くモンゴル族に合流し、遼寧省などモンゴル人コミュニティから遠く離れている地域に暮らす蒙古八旗の子孫は満族に合流していたことが分かった。その結果として『境界に生きるモンゴル世界―20世紀における民族と国家』(ユ・ヒョウヂヨンとの共編著)（八月書館、2009年3月）を出版することができた。

(2) 21年度の海外調査では主に新疆に配属されていたチャハル八旗の子孫でモンゴル国の独立のときに合流した人々について調査し、蒙古八旗の子孫一部は清朝の滅亡と同時に民族意識が空前に高まり、断固独立運動に参加していたことが分かった。21年度は内モンゴル自治区の旧綏遠城の旗人の子孫および隣接する山西省右玉県で旧右衛城の子孫に対する調査を行った。そこで分かったことは内モンゴル西部における漢族文化の受容が清代の綏遠八旗と右玉駐防城の存在による地域一体化と深くかかわっていたことが分かった。これは今までのモンゴル史研究および清朝史研究では見落とされてきた部分である。

(3) 最終年度に当たる平成22年度においては、内モンゴル自治区中西部のトメド左翼旗において庄頭と呼ばれる清代旗人の子孫に対して調査を実施し旗人集団の外郭にいた彼らが1950年代の民族識別においてとった行動を明確にした。また内モンゴル東北部フルンボイル地域でダウールやエベンキ、

バルガなど八旗に編成されていた人々の子孫の現代的生活形態を調べ、かつて新満洲と呼ばれていた彼らのモンゴル、ツングス系の人々が現在内モンゴル自治区で個別民族として民族生活を送っていて、多民族国家現代中国の民族的枠組の形成は多数の小集団の認定によって大集団の分散を図ったという民族識別の政治的仕組みの一端を伺うことができた。この研究を通してもう一つ明らかになったことは、1950年代以後に満族として認定された人々は現代中国で政治的地位を獲得するために辛亥革命に参加した旗人出身の英雄の一人として遼東のバルガ・モンゴル出身の旗人鮑華南を担ぎ出してきたが、それには多くの歴史的誤解があったことが明らかになった。

総じて、今回の研究を通して清朝史研究の中で今まで軽視されてきた帝国崩壊の仕組みについてある程度その研究の意義を打ち出すことができたばかりではなく、もう一つの帝国ー中国の組み立て過程における人間集団の離合集散の政治的流れをつかむことができたと考えている。そしてこの研究を今後において完成させるべく基礎は作れたのではないかと位置付けたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①ボルジギン･ブレンサイン「中国領モンゴル人が母語で文化人類学を学べることになった一内モンゴル大学の「民族学社会学学院の紹介―」『日本とモンゴル』43-1（No、117）日本モンゴル協会、2008 年 9 月、pp113-116

②ボルジギン･ブレンサイン『世界史史料』第 9 巻　151「抗墾闘争―貽谷の上奏文（1902 年 8 月 6 日）、pp250-251

③ボルジギン･ブレンサイン『世界史史料』第 9 巻　150「清末新政と「移民実辺」政策―岑春煊の上奏文（1901 年 4 月 20 日）、pp251-252

④ボルジギン・ブレンサイン「近現代ハラチン・トメド地域における地域利益集団の形成」東北大学東北アジア研究センター・シンポジュム報告書「内なる他社＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」―モンゴル華南の視座から―」東北アジア研究シリーズ⑩2009年、pp117-128

⑤Burensain Borjigin “Internalization of Cultural Conflict and Modern Mongolia : A case study of Land dispute between Haisan and Namsarai Wang of Tushiyetuhan Aimag” A new Global Order in North East Asia 2009、pp345-352

⑥ボルジギン･ブレンサイン「旅蒙商（一九三九年）」『世界史史料』第四巻、岩波書店、2010 年 11 月

⑦ボルジギン･ブレンサイン「私墾（乾隆十四年九月二日」『世界史史料』第四巻、岩波書店、2010年11月

〔学会発表〕（計 11 件）

①ボルジギン･ブレンサイン「中国東北三省のモンゴル人世界」日本モンゴル協会講演会　2008 年 4 月 5 日、於早稲田大学

② Borjigin Burensain"*Internalization of Cultural Conflict and Modern Mongolia : A*

case study of Land dispute between Haisan and Namsarai Wang of Tushiyetuhan Aimag"「国際シンポジウム：文学・メディア・アーカイブズからみたグローバル秩序―北東アジア社会を中心に―」2008 年 6 月 23～25 日、於ウランバートル

③ボルジギン・ブレンサイン「近現代モンゴル社会の構造変動とダイナミズム」名古屋大学科研費プロジェクト（基盤研究 S）「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」第二回研究会　2010 年 1 月 23 日、於名古屋大学

④ボルジギン・ブレンサイン「リグデン著『地球宣言』の邦訳に携わって」日本モンゴル文学研究会 2009 年度秋季大会　2009 年 11 月 29 日　於大阪外国語大学

⑤ボルジギン・ブレンサイン「Altan-unaga（黄金の仔馬／Golden poney）は何処へ飛んでいったか―資源開発と少数民族の生存について―」、「第５回ＳＧＲＡチャイナ・フォーラム―中国の環境問題と日中協力―」、2010 年 9 月 13 日、於中国フフホト市

⑥ボルジギン・ブレンサイン「現代の眼差しでモンゴルを見よう」東北アジア研究センター公開講演会「モンゴル世界を考える：その歴史と現在」、2010 年 12 月 11 日、於仙台市戦災復興記念館

⑦ボルジギン・ブレンサイン「近現代内モンゴル東部における地域社会の再編」名古屋大学科研費プロジェクト（基盤研究 S）「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」第四回国際ワークショップ、2011 年 2 月 27 日、於酪農学園大学

⑧ボルジギン・ブレンサイン「周縁地域から中国の農村社会を考える」“基礎社会と国家権力学術討論会”2011 年 1 月 8 日、於南開大学歴史学院

⑨ボルジギン・ブレンサイン「現代は如何に理解されるべきか」2010 年 6 月 2 日、内蒙古師範大学旅遊学院・歴史文化学院（招待講演）

⑩ボルジギン・ブレンサイン「ハラチン・トメドと近現代モンゴル社会」2010 年 6 月 3 日、内蒙古大学蒙古学院・民族学人類学学院（招待講演）

⑪ボルジギン・ブレンサイン「現代モンゴル社会は如何に理解すべきか」2011 年 3 月 15 日、中央民族大学（招待講演）

〔図書〕（計 2 件）

①ユ・ヒョヂョン　ボルジギン・ブレンサイン編著『境界に生きるモンゴル世界―20 世紀の民族と国家―』八月書簡、2009 年 3 月

②リグデン著　佐治俊彦　ボルジギン・ブレンサイン訳『地球宣言―大草原の偉大な寓話』教育史料出版会　2009 年 9 月

６．研究組織

(1)研究代表者

ボルジギン・ブレンサイン

（Borjigin　Burensain）

研究者番号：00433235